第5回　現庁舎跡地(周辺)利活用検討分科会、まちなか再生・賑わい波及検討分科会　議事録

日時：令和8年7月13日(月)10：00～
場所：熊本市役所 4F モニター室

参加者：(委員)星野分科会長、国吉分科会長、藤本委員、田中委員(WEB)、本間委員、山下委員(WEB)
(事務局)庁舎周辺まちづくり課、都市デザイン課
(関係課)市街地整備課、交通企画課、観光政策課、企業立地推進課

・議事(3)については、各ゾーンの目指すべき姿を検討するにあたって、特定の法人など熊本市情報公開条例第7条第4号アに該当する不開示情報を取り上げることが想定され、これらの情報を公開することにより、特定の法人の競争上の地位その他正当な利益を害するおそれもあることから、分科会の合議により、「現庁舎跡地(周辺)利活用検討分科会運営要綱」第7条2項及び「まちなか再生・賑わい波及検討分科会運営要綱」第7条2項に基づき、非公開で開催した。

1 開会

2 分科会長挨拶

3 議事

(1)庁舎周辺まちづくりプラン(仮称)等検討委員会および庁舎整備に関する特別委員会で頂いたご意見について

市議会庁舎整備に関する特別委員会の審議内容について

(事務局説明)

資料1を用いて6月17日に開催された市議会 庁舎整備に関する特別委員会における審議内容について説明。

(星野委員)

新庁舎の建設費増大を受け、特別委員会では、新庁舎整備の検証について色々な意見が出ているようである。この分科会の議論内容、特に現庁舎跡地に関する検討については、新庁舎の議論状況を見守るという選択肢もあると思う。我々が議論を進めていくにあたり、非常に重要なご意見が出ているところ。これに関して、皆さんからご意見をいただきたい。

(田中委員)

新庁舎整備基本計画の分科会長として、市議会のご意見は認識している。新庁舎整備の検討は現在進めているところであるが、まちづくりプランにも当然影響するため、プランの議論と整合性を図りながら、新庁舎の検討も進めていきたい。

星野分科会長がおっしゃるとおり、新庁舎整備の議論が先行しているため、跡地利活用についてはその経過を見守りながら検討を進めるという考え方について私も理解している。

(星野委員)

跡地利活用検討の議論は、その様子を見守りながら慎重に行うことになると思うが、議論の進め方等について他にご意見はあるか。

(本間委員)

この分科会は、跡地利活用だけを検討するのではなく、跡地を含めた中心市街地全体の在り方を見直すための

検討の場になっていると認識している。その議論は将来を見据えて進めるべきだと思う。詳細な内容については、新庁舎整備検討のスケジュールに左右される部分もあるだろうが、並行して検討を進めていくことが望ましいと感じている。

（国吉委員）

社会情勢変化など様々な要因により、建設費が高騰するとともに、不確定な要素が数多く存在している。また、地元地権者等も建替え等について状況を見定めている段階にあり、積極的な取組にはやや慎重な姿勢が見受けられる。

そのような中で、今後状況が変化する可能性を前提として受け止める必要があると思う。他都市の事例なども参考にしながら、地域の方々の意向の変化に柔軟に対応できるよう、次の時代にふさわしいまちづくりプランについて、見直し可能な余地を持った形で検討を進めるべきではないか。

もちろん、現時点で完全な白紙とするのではなく、現時点で望ましいと考えられる方向性や選択肢は一定程度示しておくことが重要だと思う。将来的に修正を行う場合でも、その土台となる案がなければ議論を進めることは難しい。

（藤本委員）

私も同じく、新庁舎整備の検討状況を見守りつつ、新庁舎や跡地だけでないまちづくりについては議論を進め、様々なプランの可能性を考えていくべきだと思う。

（山下委員）

新庁舎整備という大きな変革期に、中心市街地のまちづくりという大きなテーマもあわせて議論されていることは意義深いと思う。現実的には様々な課題があるが、熊本の皆さんには長い時間軸で物事を考える文化が根付いていることを素晴らしく感じている。数十年先の将来のまちの姿を考えていく取組については、途中で立ち止まることなく継続していけると良いと思う。

（星野委員）

基本的には、新庁舎あるいは跡地の議論だけでなく、熊本のまち全体がこれからどうあるべきかの議論をしており、その成果の1つの形がまちづくりプランだと思う。跡地利活用検討の議論は、その様子を見守りながら慎重に進めるとともに、建替え促進や賑わい創出の検討等について粛々と議論を積み重ねていく。現時点では未定事項も多いため、柔軟性を持ちつつ、今後のたたき台となるような議論を進めていくということでよろしいか。まちづくりプラン全体にも関わるため、検討委員会等にも報告のうえ、ご意見いただきながら進めていきたい。

第５回庁舎周辺まちづくりプラン（仮称）等検討委員会の報告

（事務局説明）

資料2を用いて、6月3日に開催された第5回庁舎周辺まちづくりプラン（仮称）等検討委員会における審議内容について説明。

（星野委員）

この検討委員会では、オフィスやホテルのマーケット調査結果から、熊本には市場性や事業成立の可能性がありそうだという報告がなされた。また、プランの将来像や方向性に「熊本城」という言葉を盛り込んではどうかという意見があったが、既に取組の方向性1「城下町で育まれた歴史の趣と自然の魅力を活かす」の中に要素が盛り込んである。岸井委員長よりもっと分かりやすく伝わるようにすべきとのご指摘があった通り、しっかり伝わっていない可能性がある。

その他、検討委員会の報告に関して確認したいことはあるか。

（田中委員）

需要調査の結果を踏まえ、ハイスペックなオフィスやホテルをベースとして検討が進められているが、それらに限定するのではなく、熊本らしいリノベーションによるホテルや住宅の導入なども含めて、幅広い用途や機能を取り入れ、多様な需要を受け入れていくという視点が重要ではないかという意見が特に印象に残っている。

また、地下通路の整備を望む声もあるが、地下に限らず、地上においても快適かつ円滑に歩行できる環境をどのように確保していくかという点は、この分科会の議論に深く関わるテーマである。

（星野委員）

先程の田中委員の発言は、プランの内容として、「リノベーションによるホテルや住宅」や「低層部の庇」など、今後の議論の中で入ってくる具体的な内容が重要ということであったかと思う。個人的には「緑陰」の要素も入れたいと思っている。

注意すべき事項などでも構わないが、他にご意見はあるか。

（本間委員）

都市には重層的なイメージが必要だと思う。ある場所だけが急に更新されても、20～30 年も経てば新鮮さは失われ、結果として、まち全体が虫食いのような状態になりかねない。そのため、現状も踏まえながら、都市全体が継続的に進化していくような形が必要だと思う。

跡地については、起爆剤となるような取組も必要かもしれないが、それがまち全体へ広がっていくことを考えると、例えば回遊性を高める仕組みについても、地下通路を大規模に整備すればよいということではない。既存のスペースや通路、さらには建物内部の空間などとも連携しながら進めていくことが重要だと思う。

昨年、公開空地の研究を行った。まちなか再生プロジェクトにおいても建設時には各地権者や建築主が公開空地を整備する一方で、その後の活用は十分に進んでいないのではないかと感じている。また、完成後のモニタリングも十分ではないという指摘がある。市に対しても、公開空地が本来の公開空地として適切に利用されているか確認してはどうかという話をしている。

今後は、既に存在するリソースを有効に活用しながら、新たなリソースとも組み合わせ、多様な空間を創出していくことが重要だと考える。

（事務局）

まちなか再生プロジェクトを活用された箇所については、継続的に状況の確認等を行っている。公開空地としては整備されているが、ご指摘のとおり、その活用が十分に効果的かという点では課題が残る部分もある。今後は関係部署や地域と連携しながら、公開空地のよりよい活用方法について検討していく必要があると考えている。

（本間委員）

敷地内だけで捉えるのではなく、公開空地同士の連続性や、エリア全体の中でどこに配置されているのかといった視点も必要ではないか。

（星野委員）

十分に活かしきれていない部分はあるかと思う。先ほどの議論ともつながるが、一か所だけ良い場所をつくるためのプランではなく、これをきっかけにどのようにまち全体へ波及させていくのかという視点が重要である。そのためには、多様なコンテンツや、それらの様々なつながり方があった方が良い。

（藤本委員）

「新旧融合で多様な需要を受け入れる視点」というご意見についてコメントする。検討を進める中では、必要な機能として、あるいは優先度の高いものとしてホテル等の議論が進んでいるが、その一方で、地域の方の利用という視点が後回しになっている面もある。地域に開かれ、様々な方に柔軟に利用していただけるかという視点も含めて検討していかなければ、新たな需要の創出のみを重視することとなり、地域の拠点として果たすべき役割

が薄れてしまうおそれがある。

（星野委員）

ご指摘のとおり、現状存在していない新たなものを追加すべきという方向に論点が向かいがちであると思う。

（本間委員）

熊本城へのアプローチの在り方が重要な課題であると考える。熊本城は市民のみならず、観光客にとっても大きな資源であるが、熊本城とまちなかとのつながりが十分ではないという感覚は、市民の間にもあるのではないか。また、現庁舎跡地はその中でも特に重要なポイントとなると考える。そのため、「熊本城」の言葉を盛り込むという考え方は、「熊本城へのアプローチの在り方」という視点に読み替えることもできるのではないか。

（星野委員）

熊本城とまちとのつながりは、以前から議論されてきた課題であり、この点についてしっかりとした提案ができるかどうかが重要である。

（本間委員）

どのようにそこへ到達するのか、また、その過程で何らかのアクティビティや楽しみがあるのかといったことが重要ではないか。

（星野委員）

今後のプランのコンテンツとして、しっかり検討していく必要がある。他にはいかがか。

（国吉委員）

熊本城については、単なる観光資源として捉えるだけでなく、あの広大な空間そのものが持つ魅力を生かし、市民参加型のイベントなどが積極的に開催されるような、市民にとっての豊かな広場として活用を推進していくことが重要である。さらに、それと連動したまちなかでのイベントも同時に開催することができれば、熊本城とまちなかを行き交う人の流れが生まれ、アクセスの向上にもつながると考える。観光客のためだけの熊本城ではなく、熊本のセントラルパークのような存在として位置付ける視点についても、まちづくりプランの中で検討していけると良い。

（星野委員）

先ほど藤本委員がおっしゃられた「地域の方の利用」とは、まちなかにある様々な要素だけでなく、熊本城そのものについても、地域の人々のための場所となるようにするということかと思う。

（国吉委員）

歴史を感じながらも、新しい価値をつくっていくという二面性を持った市民生活が楽しいと思う。

（星野委員）

昔は二の丸広場のプールなど、市民が利用する場としての側面もあったが、次第に観光客向けの空間としての性格が強くなってきた。

また、検討委員会で指摘のあった「期待すること」という表現については、行政が取り組むべき事項だけでなく、民間にも期待する役割や取組をどのように表現するかが重要である。例えば、「ともに目指す」など、今後、委員の皆様の意見を踏まえながら修正していけると良い。そのようなことを念頭に置きながら、次の議論を進めていただければと思う。

（山下委員）

熊本市のアーケードには非常に多くの人が集まっているが、その人流が周辺エリアの活性化に必ずしも十分につながっていないのではないかということが課題かと思う。

鳥取大学の吉野和泰先生によれば、「日陰の連続性」が重要とのことである。ヨーロッパでは熱波により死者が出るなど、人命にも関わる問題となっているが、吉野先生が言及されていた「緑陰」に加え、テントなども含めて、

日陰の連続性を確保することが、アーケードに集まる多くの人々の回遊行動を促していくことにつながるのではないかと考える。その点について皆さんと共通認識を持ち、人流がより広くまち全体へ流れていくようになれば、民間の皆さんは主体的にその人流を活かして経済活動を自ら展開できる方々だと思っている。実際、中心部から少し離れたエリアでは、「疎空間」も価値化したことで新たなチャレンジが始まっているようにもお見受けしている。そうした状況も踏まえながら、まさに民間の皆さんとの連携のもと、積極的に、まずはできるところから取り組んでいくという視点を盛り込んでいけると良いと考える。

（星野委員）

まちづくりプランは、目指す姿を示すだけでなく、それをどのように実現していくのかまで含めて示す必要があるため、今後も皆様の知見やご意見をお借りしながら検討を進めていきたい。

（2）くまもとまちづくりラボでのご意見・アイデアについて

（事務局説明）

資料3を用いて、昨年11月から本年7月に渡り開催したくまもとまちづくりラボに関し、各チームの最終回の発表内容やこれまでに出た意見、アイデア等について、事務局より説明。

（星野委員）

まちづくりラボには、田中委員、国吉委員とともに参加した。ラボでは学生、地域の方、あるいは開発や不動産の専門事業者といった異なる属性を混ぜた 5 チームが、計 7 回にわたり継続的に議論を重ねた。運営側としては、チーム毎に継続して建設的な議論ができるか心配もしていたが、チームによっては懇親会も開催するなど、新たな交流も生まれた。それが今後どのように続いていくかも重要であるが、交流が生まれたこと自体も成果であると考えている。

全体としては、参加者の皆様が貴重な時間を使い、真摯に議論していただいたことに感謝している。同時に、大きな方向性としては、これまでの検討委員会や分科会での議論と、ラボで出た意見やアイデアが十分につながる内容であることを確認できたため、安心したところ。今後、これらをまちづくりプランにどのように活かしていくべきか、皆様からご意見をいただきたい。

まず、事務局からの説明の繰り返しになるかもしれないが、私の感想をお伝えしたい。

チーム１では、国吉委員からご発言のあった「熊本城のセントラルパーク化」のアイデアが提案されている。熊本城を観光客だけでなく、市民にも開かれた場とする案が強く示されていたことが印象的であった。

チーム 2 は、藤本委員もおっしゃったように、地域を非常に重視していた。特に「子ども」をキーワードとしており、熊本のまちの大人たちは「子どもの頃からまちで遊んでいた」という共通した経験があり、そうした経験の厚みのようなものから出た意見でもあり、子どもの頃からの経験がまちへの愛着につながるとの指摘をいただいた。

チーム 3 は、跡地のインパクトを周辺へしっかりと波及させることを重視していた。まちへの投資に対するインセンティブをしっかり考えていく必要があるとの指摘をいただいた。

チーム 4 は、回遊性を重視していた。これまでの議論で必ずしも強く打ち出されてこなかった銀座通りや駕町通りについて、効果をより広く波及させていくうえでの重要なルートであるとの指摘をいただいたことは良かった。

チーム 5 は、熊本城をより一層まちに活かすため、先ほど本間委員がおっしゃったアプローチについてのご意見と関連するが、城をまちからどのように眺めるか、豊かな視点場をもっと増やしていくべきではないか、また、新区役所が予定されているエリアについても、駐車場となっている部分をどのように変えていくのかが鍵ではな

いかとの指摘をいただいた。

私の理解では以上のような内容であるため、気付いた点があればご指摘いただきたい。

まずは、国吉委員から感想も含めたご意見をいただきたい。

（国吉委員）

まちづくりラボの意義は、行政が一方的に進めるまちづくりではなく、今後、主体的にまちづくりに取り組む市民がどのように育っていくかが重要であるとの考えのもとにスタートした点にあると思う。

そうした意味では、まちづくりの専門家と称する方々は、どうしても最新事例などに目を向けがちであるが、市民の方々は必ずしもそうした視点だけではなく、自分たちの生活や暮らしがいかに豊かになっていくかということを視野に入れた意見が多かったと感じており、子どもの立場を含めたさまざまな視点から意見が出されたことも非常に興味深く、印象的であった。

また、公開空地に関しては、これまではまず面積を広げるといった定量的な視点を中心に考えてきたが、それだけでは面白みに欠ける面がある。まちなか広場などについても、そこで何を行うのかという議論が起こってきたと思う。そうした中で、ラボにおいても、公開空地であっても単一ではなく個性のある広場として、特色ある使い方をしていくことを目指すべきであるとの意見が出てきたことは良かったと思う。

また、それは公開空地だけの問題ではなく、公開空地に面する建物で行われる活動も、公開空地の役割を支えるものである。地域の暮らしや活動とリンクした公開空地づくりができれば、事業者側や建物所有者側にも、単に空間整備だけでないことを理解していただきやすくなると思う。そのような工夫へと展開していくことが望ましいという意見が、今回のラボの中でも挙がっていたと思う。

また、「もっと回数を増やしてほしい」「このまま終わりたくない」といった意見もあった。このような場は、必ずしも行政が継続して運営する必要はないと思うが、こうした活動を通じて市民グループが育ち、その中から NPO 法人を設立したり、主体的に情報発信を行ったりするなど、単なる市民ではなく、市民の視点を持ったまちづくり組織が育っている都市もある。

そうした事例が熊本でも生まれてくるのではないかという期待を持てたことは、大きな成果であったと思う。

また、今後ラボの成果を広く発信していくことで、「自分たちも考えてみよう」と思う市民の方々が増えていくのではないかという期待感も持つことができた。そうした意味でも、今回のラボは意義のある活動であったと感じている。

（星野委員）

確かに、「もっとやりたい」といった意見もあった。

それでは、田中委員から、まちづくりラボに関するご意見やご感想をいただきたい。

（田中委員）

参加された市民の方々には、それぞれ専門性を持ったプロフェッショナルが多く、行政関係者や学生の参加もあり、多角的な視点からさまざまな検討ができた非常に良いラボであったと思う。

ラボの最終回でも申し上げたが、今回で一区切りではあるものの、むしろ中間的な位置付けで捉えるべきではないかと感じている。5 つのチームがそれぞれ異なる視点から、回遊性、賑わい、まちの活性化について考察を重ねた。

例えば、あるチームは熊本城を中心とした視点から検討を行い、また別のチームは、コンテンツがなければ人は回遊せず、結局は人の営みが重要であるという考え方を示した。さらに、生活していくためには稼ぐことや経済の視点が重要であるという意見や、魅力的な空間とは何かという観点から、視点場や回遊ルートについて検討したチームもあった。

それぞれのチームが独自の視点から議論を深め、一定の成果を上げることができたと思うし、全体としても素

晴らしい成果が得られたと感じている。

これを中間だと考えるのは、ここで得られた成果や議論をいかに積み重ね、さらにどのように実現へとつなげていくかというフェーズが極めて重要だからである。

参加者の皆さんも、その点が重要であることを十分に理解しており、引き続き参加したいという思いがあるからこそ、「もっとやりたい」という意見につながったのだと思う。

今後については、市にもぜひ検討いただきたいが、できる限りこうした議論を重ねながら実現化に向かうプロセスを進めていくことが重要である。その際、まちづくりラボのメンバーだけでなく、より多くの市民の皆さんの意見を聞きながら、一緒にまちをつくり上げていく仕組みをどのように構築していくかが大きな課題である。

また、いただいた視点や成果を、まちづくりプランにどのように活かしていくかについても、私たちは大きな責任を担っていることを改めて認識した場であった。

（星野委員）

一方で、まちづくりプランには書ききれないアイデアも多く、具体的な施策内容までプランに盛り込むことは難しいと思われるが、まちづくりラボを通じて生まれた思いや、まだラボをやりたいという意欲は大切にしたい。さらに、プラン策定後にどのように取組を進めていくのかについても、スケジュールを含めて具体的に記載できると良い。事務局で考えていることはあるか。

（事務局）

まちづくりプラン自体は将来像を示すビジョンである。具体的な施策についてはプラン策定後の取り組むことになると思われるが、何らかの方向性については示していきたい。

（星野委員）

その部分に、ラボの延長となるような市民の巻き込み方が位置付けられ、書き込めると良い。そのプロセス自体についても皆さんからアイデアをいただけると良い。その他はいかがか。

（藤本委員）

人はどうしてもアーケードに集まりがちな一方で、熊本城や鴛町通りなど、中心となり得るポテンシャルの高い場所も数多く存在しており、今後さらに生まれていく可能性もある。そうした中で、それぞれのアイデアをどのようにつなげていくかが重要になってくると思う。

（星野委員）

市庁舎周辺やサクラマチだけではない魅力があるということだと思う。それをどのように盛り込んでいくかが重要である。

（本間委員）

5チームから非常に多彩なアイデアが出ており、見ていて興味深い。これらを集約していくことも重要であるが、あわせて、それらをどのように実現していくのか、その可能性を検討することが必要であると思う。例えば、熊本城をセントラルパークのような形で市民が集える場としていくためには、どのような取組が必要で、どこでイベントが実施できるのかといった実現可能性調査も必要であると思う。それについては、アイデアだけで終わってしまわないよう、可能性を検討していただきたい。ビジョン全体を共有していくことは重要であるが、それぞれのアイデアがどこまで実現可能かを検討できると、さらに面白いものになると思う。

例えば、個人的に興味があるのは、電車通りのトランジットモール化である。本当に実現できるのか、実施した場合にどのような効果や影響があるのかについては、一定程度検討していけるのではないかと思う。アイデアを具体化していくに当たっては、その可能性や実現性を検討できるとよい。なぜトランジットモール化が面白いかというと、まちの姿を最も大きく変えるインパクトを持っているためであり、市民にも「まったく違う形になった」と感じてもらえる可能性がある。また、行政が主体的に取り組めば実現できる内容でもあると思う。どちらかという

と、民間にお願いし、民間の努力に頼らなければ実現できないアイデアについては、行政はお願いベースでしか動けなくなってしまう。これに対し、道路や公共空間に関する取組は、行政に実施主体としての役割があるため、やる気があれば実施できる。ぜひ、その可能性について検討していただきたい。コストの問題もあるが、まずは実現可能性があるのか、担い手が存在するのか、市民がどのように考えるのかといった観点で整理してはどうか。

（国吉委員）

まちづくりラボで出された様々な意見の中には、実現したいものが数多くあったと思う。しかし、それらすべてに満遍なくアプローチしようとしても、実現につなげることは容易ではない。これらのアイデアについては、広くPRしていくこととともに、魅力的なビルのオーナーや影響力のある組織の代表者などが、「やってみよう」と思うことが重要ではないかと思う。

そのような機会が生まれた際には、行政が集中的にフォローすることが重要である。単に資金面で支援するのではなく、実現に向けた施策を一緒に考えるなどの支援を重点的に行うことで、具体的な事例を一つでもつくることが重要である。そうすることで、まちづくりラボの成果が実際に活かされていることを、多くの人が実感できる場にもなる。

民間事業者等の取組みについては、網羅的に支援するのではなく、他をけん引するような核となる取組を重点的に支援することが大事だと思う。それが結果として、他の事業者にも影響を与え連鎖的な効果が生まれることは多いため、関係者には、まず先行事例を早期につくることを意識して取り組んでいただきたい。また、その事例も中途半端なものではなく、できる限り突出したものを目指すことが重要であると思う。

また、公開空地の取り方は、歩行者ネットワークとも密接に関係する。デッキを整備する場合でも、公開空地にゆとりを持って確保しながらデッキをつなげていくことで、公開空地、歩行者デッキ、さらにはビルの上階部分の活性化につながり、まちとして有益になる。また、他都市の様々な事例も紹介しながら、単なる空間整備ではなく、建物の価値が上がり有益であることを、民間事業者に伝えていくことも重要である。

（星野委員）

本間委員と国吉委員のご意見は、まちづくりプランを単なるアイデア集に終わらせないためには、実施可能なものから着実に取り組むことや、メリハリを付けた対応が重要であるという趣旨であるかと思う。

そのような議論につなげていくためには、まちづくりプランにどの程度まで具体的に書き込んでおくべきだろうか。

（本間委員）

まず、大きなビジョンを示すことが最も重要であると考える。ビジョンをしっかりと伝えた上で、そのビジョンを具体的にイメージできるような突出した事例を示すことが必要であると思う。一方で、具体的な施策の細部や実施事例までプランに書き込むことには限界があると思う。また、関係者の巻き込み方についても工夫が必要である。

（国吉委員）

国もウォーカブルシティに関する社会実験等を支援する体制を整えているため、そうしたことも活用しながら、具体的なチャレンジや事例の創出に努めることをプランに位置付けてもよいのではないか。その際、関連施策も活用しながら推進していく方針を示すことで、関係者の意欲向上にもつながると考えられる。本間委員がおっしゃるとおり、具体的な進め方を誘導するような表現を盛り込むことも検討してはどうか。

（星野委員）

まちづくりプラン策定後の実現プロセスの中に、社会実験は比較的取り込みやすいと思う。その社会実験を、今後のプラン実現に向けてどのように組み込んでいくかについて記載するとともに、ラボから提案された実験のアイデア例をいくつか盛り込むことも考えられる。

（田中委員）

プランへの反映の仕方は様々であり、難易度が高い取組についてはラボからの提言として社会実験の位置付けも考えられる。例えば、チーム4が提案していた銀座通りについては、既に回遊のうえで重要な場所としているラダー上の路線であるが、銀座通り・駕町通りについて「2核3モール」だけでない新たなサブループとして位置付けるといったように、比較的抽象的なアイデアについても、まずは具体な取組として社会実験から実施するという手法もあると思う。こうした考え方は、ラボの成果として具体的に取り入れてよいと考える。

例えば、「熊本城のセントラルパーク化」実現はかなり難易度の高いテーマであると思うが、内容を丁寧に読み込み精査していくと、施策に結び付きやすい優れたアイデアが数多く含まれていると思われる。こうしたアイデアについては、実際にまちづくりプランへ書き込んでいくことがあってよいと考える。

（星野委員）

今後まちづくりプランの内容を深く議論していくにあたり、まちづくりラボのアイデアを横に置きながら、より充実させるということが重要になる。一方で、たくさんのアイデアを頂いているため、事務局の方で考慮すべきアイデアをピックアップしていただきたい。まちづくりラボの成果を踏まえて、プランそのものを変えることも大事であると思う。

（本間委員）

社会実験については、庁内でも既に様々な動きがあると思うので、それらと上手く連携して進めていく必要がある。

（星野委員）

確かに、まちづくりラボでよく意見が出た上乃裏通りに関しても、既に様々な実験等に取り組まれている。

（事務局）

社会実験については、以前と比べると国からの支援をかなりいただけるようになった。ラボでのご意見も含めた様々な視点を踏まえ、できるだけ有意義な実証実験ができるように取り組んでいきたいと考えており、委員の先生方にはお知恵をいただければと考えている。

（星野委員）

他にも、何らかの組織や協議会づくりについて、ラボではそのような趣旨の意見が多く含まれているが、ご意見いただきたい。他都市などの計画においても、協議会のようなものを設置して取組を進めていく旨の記載をよく見かけるが、実際には十分に機能していない場合も少なくない。

（本間委員）

プロモーションのためのスペースのようなものは、海外では比較的よく整備されている。例えばベルリンでは、再開発を進めるに当たり、壁崩壊後の跡地の中心部に、将来のまちの姿を示す展示施設を設け、都市計画のプロモーションを行っていた。こうした取組の果たす役割は大きいと思われる。また、中国の各都市で再開発が進められていた際にも、多くの都市でプロモーション用のスペースが整備され、常設展示が行われていた。組織の設置も重要であるが、それと同様に、このようなプロモーションを生み出す拠点のようなものがあると良いと考える。

（星野委員）

花畑広場の整備に際しては、仮設バスターミナルの脇にプロモーション用のスペースを設けてもらったが、やや地味な印象であった。より充実したものをイメージしているが、このような拠点を設けて上手く活用していくことができれば、情報が集まるとともに、人々が集う場所にもなると考える。

（本間委員）

目に見える形になるという意味では、組織や協議体の設置と同義かと思う。

（星野委員）

その場を運営する主体が、市民を巻き込みながら活動するグループへと発展していくと良い。アーバンデザインセンターのような組織まで踏み込むかどうかという点はあるが、それほどの規模感を持つプロジェクトであると思う。

組織づくりに関する内容も大事だと思うが、まずは情報発信やまちづくりに興味を持ってもらうための具体的なアクションや場と関連付けながら進めていくという考え方も大事かと思う。

（国吉委員）

名古屋などでは、まちの将来像についての展示会やシンポジウムが開催されており、各国の優れた事例を紹介・披露しながら、市民と海外の専門家がそれぞれ発表を行っていた事例がある。

名古屋以外にも、このような国際シンポジウム等の開催と、まちづくりに参加する市民会議などを組み合わせながら、徐々に国際的な広がりを持たせていった事例がある。それによって、海外からの関心だけでなく国内の他都市からの関心も高まり、結果として地主や関係者の意識が少しずつ深まっていくような効果が期待できる。

そのためには費用面の課題もあり、経済界からのスポンサードをはじめ様々な工夫が必要となるが、そのような取組を含めた PR は有効ではないかと思う。現在のように建設事業が円滑に進みにくい状況だからこそ、そうした「考える時間」を有効に活用することが重要である。大学に協力いただきながら進めていくことも、有効な手法ではないかと考える。

（星野委員）

プロモーションの時間として活用することも大事ということだろう。そもそも、まちづくりプランを議論している背景には、熊本における半導体関連産業の集積がある。もともと国際的な動向とも深く関わるテーマであることから、その原点を踏まえつつ、国際化の視点も重視していくことが重要である。

（国吉委員）

場合によっては、対象を熊本市のみに限定する必要はないかもしれない。熊本市を中心としながらも、様々なまちの取組や活動が披露され、それによって地域全体が注目を集めるような展開も十分に考えられるのではないかと思う。

（3）各ゾーンの目指す姿について

特定のエリアや場所に係る法人の開発意向などを事例としながら、まちなかの回遊性向上にかかる施策と、インセンティブの在り方と民間事業者と整備イメージを共有するための表現手法等について議論を行った。

まちなかの回遊性向上について

※特定の個人、法人に関する議論については非開示。

（山下委員）

熊本のポテンシャルについて改めて考えると、「密」の場所と、ゆとりのある「疎」の場所がバランスよく存在しており、その魅力に気づくきっかけをどのようにつくるかが重要だと思う。

また、そうした「密」と「疎」の関係性に加え、そこに森の都として緑が多く存在し魅力的な「密」と「疎」の場所の連続性を高められるという可能性を内包している熊本ならではの都市構造を、例えば一つのコンセプトや名称で表現できれば、熊本らしさをより分かりやすく共有できるのではないかと感じた。

（田中委員）

熊本の歴史、自然、景観、個性あふれる街並みや地上に集約された交通インフラ等の特性を踏まえると、地上レ

ベルでの回遊性向上を図ることが望ましいとは思うが、具体的にどのように実現するのかをもう少し詰めていきたい。例えば、金沢市の竪町商店街では地区計画によって各建物から庇を出し、連続性のある空間を形成している。また、台北には歴史的な建築として、雁木のような民間の回廊が連続する街並みがある。やはり、「熊本型の密度の中の余白」のようなものを、まちなかで具体的にどのように実現していくのか、施策も含めて何を目指すのかというビジョンを描き、共有することは非常に重要である。そのため、他都市の事例も参考にしながら考えていけると良い。

（星野委員）

地上レベルでの回遊性向上が望ましいということは理解できるが、具体的にどうしていくのか、他都市の事例も参考にしながら議論していく必要がある。

（事務局）

現在、庇や緑陰、広場への植樹といった陰の価値等について事例収集を行っているが、何がベストな手法かという議論までは進んでいない。今後は、事例や具体的な手法等についても分科会に提示しながら、議論を深めていきたい。

（星野委員）

松山市のロープウェイ通りでは、オーニングを統一することで良好な街並みを形成している。やはり、もう少し具体的なところまで踏み込んで考えていく必要があると思う。

（本間委員）

地下鉄や地下街などの目的地がないという熊本の特性を踏まえると、地上空間での回遊性向上を図ることが自然な方向性だと思う。

回遊性を考える際には、パス（経路）だけでなくノード（目的地）の存在も重要であり、人はノードからノードへ移動することで回遊する。滞在空間や少し休める場所、ポケットパーク、店舗前の空間など、滞留できる場所がノードとして存在し、それらとパスがうまく連動することで面的な回遊性が生まれていく。

先ほどの公開空地の話にもつながるが、こうした小さな空間を官民が連携して活用し、歩きやすく、一休みしやすい、ゆったりと過ごせる空間を中心市街地全体で考えていく必要がある。アーケードが評価される理由の一つも、広々としていて、気軽に休める場所があることだと思う。

一方で、熊本の中心市街地には休憩できる場所が比較的少ないため、今後は空地と連携していくという考え方が重要だと思う。

（星野委員）

連続した陰の実現は難しいかもしれないが、破線的であっても陰をつないでいくことは大切だと思う。

（国吉委員）

地上レベルを優位に考えていくことは非常に良いと思う。なぜ地下への誘導やデッキを見直してまで進めるのか、という意見も出てくるだろう。そのため、本当にこの方向性を進めていくのであれば、それに対する本気度がもう少し見える形になった方が良い。

例えば、銀座通りの交差点に公開空地を活用して広場を整備するとしても、小規模にとどまるかもしれない。しかし、そこを本当に重要な場所と位置付けるのであれば、市が用地を取得してでも公共広場として確保するという考え方もある。そうすれば、まちの中心となる拠点をつくることができるし、ベンチなどを設置して、電車やバスを待つ間に高齢者が休憩できる空間にもなる。

回遊を促すためのまちなかの拠点として、主要な交差点部分にしっかりとした広場空間を整備することを示せれば、デッキや地下空間を望む方々にも納得してもらいやすくなるだろうし、それ自体がウォーカブル熊本のシンボル的な空間として発信することもできる。国の支援制度等も活用しながら、そのようなチャレンジも今後は必要

になるかもしれない。

また、韓国では交差点に大きなシェルターを整備し、夏場には涼しい風やミストが出るような工夫も行われている。地上のウォーカブル空間を推進するのであれば、そのような新たな施設整備とあわせて PR していくことも重要である。デッキや地下空間を新たに整備することと比較するのであれば、広場空間への公共投資という選択肢についても十分に検討する価値があるのではないか。

（星野委員）

確かに、地下通路やデッキを求める声というのは、回遊性の向上に向けた行政からの積極的な投資を期待するメッセージとも捉えられるかもしれない。

（事務局）

シンボル的な空間ということについては、今日の議論を踏まえながら、その必要性を考えていきたい。市民の皆さんにとって納得感があり、わかりやすいものとするとともに、先ほどアドバイスいただいた実証実験なども取り入れながら、「まちが良くなった」と実感していただけるような、目に見える取組を検討していきたい。

（藤本委員）

電車通りでは、車と歩行者の動線が交錯し、渋滞の一因にもなっているため、地上が回遊のメインとなることで現状がどのように変わっていくのかを示すことが大事である。信号待ちの時間を快適に過ごせる空間整備や、横断歩道の仕組みを見直したりするなど、電車通りで隔てられた重要なポイント同士をつなぐための具体的な方策を示していくことが必要ではないか。

インセンティブの在り方と民間事業者と整備イメージを共有するための表現手法等について

※特定の個人、法人に関する議論については非開示。

（田中委員）

市民等へ分かりやすく伝わるように、低層部への賑わい機能導入や公開空地の確保、敷地の集約化、庇や緑陰などによる暑熱対策などの取組のイメージを視覚的に示すことが重要である。

具体的な施策については、より詳細なイメージ図や説明を示すと良いと思う。

（星野委員）

デフォルメしても良いので、人の活動といったことも表現できると良いと思う。

（藤本委員）（本間委員）

プラン対象エリアから周辺への波及やつながりといったことも表現できると良いと思う。

4. 閉会